アーティストインタビュー
瀧原弘子さん（三角フラスコ）

—幼少期から今に至るまでのお話を伺えますか

瀧原：出身は仙台市青葉区です。うち、青葉区でもちょっと山側のほうで。周りが畑とか林とかみたいなところで育ったので、子どもの頃はなんか、木に登ったり畑に穴を掘ったり、池に石を投げたりするような、外で遊ぶのと。あとはうちの中で絵を描いたり、粘土をこねたり、工作をしたりしながら過ごしてて。
で、子どもの時、近所にあんまり女の子がいなくて、年が近いのが、弟が 1 人いるんだけど、あとは男の子ばっかりだったから、外で遊ぶのとかはもう男の子と一緒に遊んでて。逆に女の子とどうやって遊んでいいかよく分かんないみたいな子ども時代を過ごしていました。

—演劇を始めたのはいつだったんですか？

中学校の演劇部に入ったのがたぶん一番最初です。中学校は、全員何かの部活に所属しなくちゃいけなくて。アクティブな子どもだったけど、運動系の部活はあんまりいきたくなくて。なんだろう、勝ったり負けたりするのが好きじゃなくて。小学生の時に、剣道 1 年半ぐらいやってたのですが、最初に試合に出た時に負けたのね。で、めちゃ悔しくて泣いたんだけど、そのあともう 1 回試合出て勝った時に、勝てばうれしいと思いきや、勝ってもあんまりうれしくなくて。あんまり勝ち負けのあるものは向いてないなと思って。
で、文化部の中で一番できそうな感じのが演劇部だったから、演劇部に入って。その時に。あ、そう、その前に、私すごい『ガラスの仮面』好きだったから。演劇部が楽しそうだなと思ってたり。あと親が結構お芝居とかミュージカルとかに連れて行ってくれてたのもあって演劇部に入って、その時に、三角フラスコの生田恵は小学校から同級生だったんだけど、同じ演劇部に入って。最初はもともと合唱部に入ろうかなって言ってたんだけど、合唱部があんまり活動してなくて人数少なくてっていうので一緒に演劇部に入って、お芝居をそこから初めて。高校は別々の高校に行ったんだけど、高校も演劇部に入って、そのあとずっと続けていますっていう感じですね。

瀧原：中学生の時に高校演劇コンクールを観に行ったりとかしてて。だからそのまま高校生になってもお芝居を続けるつもりでいて。で、高校も演劇部に入ってそのまま続けてました。

—役者だったんですか？

最初は部活だから照明とかもやってたんだけど。最初から、そうですね、俳優やってました。2 年生の時かな、自分のところの高校の 1 個上の先輩が、ほかの高校の演劇部の先輩の世代の人たちと、冬ぐらいにプロデュース公演みたいな形で戦災復興記念館借りて公演をやってて。そのあと、私が高校 3 年生の時の夏休みに、やっぱり演劇部の、ほかの学校の演劇部の人たちと一緒に、エル・パークでプロデュース公演みたいなのをやったりしてて。高校生の時から、自分の高校の演劇部、あんまり人数が多くなかったから、そういう感じで外での公演とかもしてて。その 3 年生の夏休みの時にやった、一緒にお芝居やった人たちと、卒業してから一緒にお芝居しましょうっていうので、劇団を立ち上げたような感じ。

—それでできたのが。

瀧原：三角フラスコ。

—で、20 代になって三角フラスコの活動がメインになっていく。

瀧原：そうですね。

—立ち上げ当初の三角フラスコはどんな作風でしたか？

瀧原：フラスコ自体は、今、結構、会話劇みたいな感じでお芝居してるけど、最初のうちは、もうちょっとなんか、ファンタジーな感じのお芝居をしてましたね。一番最初は、旗揚げ公演みたいなのは榴岡公園の野外ステージでやって。『こぼれ落ちるもの』っていうタイトルだったんですけど、バケツの水をかぶったりするような（笑）、お芝居でした。

瀧原：たぶんね、35 ぐらいまでは、ずっとなんかその勢いで進んでいくような感じ。

—県外でもされてますね？

瀧原：県外でもしてました。最初はたぶん 1999 年ぐらいに、アゴラの大世紀末演劇展っていうのを、1999 年、2000 年だから本当に世紀末あたりに東京でお芝居をしたり。あとはそのくらいから、東京と弘前と大阪とやってて。盛岡でも何回か公演をしてますね。

—どんなメンバーでしたか？

瀧原：メンバーは、もともとはじまりが高校演劇だったので、同世代の高校でお芝居してたほかの学校の人たちがメンバー。最初だから、最初でもね、10 人近くいたのかな。で、やっぱりふつうにみんなが大学を卒業するぐらいの歳、22 歳ぐらいの時ぐらいに、続けるか続けないかみたいな感じで抜けていく人がいたり、そのあとまた入ってくる人がいたりっていうのでやってて。で、30 歳になるぐらいとかでも、仕事が忙しくなったりとかっていって。入れ替わりは少しあったけど。

—劇団としては、演劇をプロとしてみんなでやっていこうとか、もしくは演劇はライフワークとしてやっていこうとか、そういう方向性みたいなものはあったんですか？

瀧原：方向性としては、たぶんライフワークのほうが近いのかなと思いますね。あんまり。公演自体は結構次々やってたけど、それでお芝居でご飯を食べていくみたいながつがつした感じではなかったと思いますね。作品を作ることに関してはすごくこだわりがあったけど、それでお仕事にするっていうのに対しては、割とそこまでこだわりがあったわけではないと思います。

—瀧さんは、高校卒業してから、仕事をしながら演劇活動をずっと続けてる？

瀧原：アルバイトをしながらっていう感じですね。今も非正規なので。私自身は、あんまり、お芝居で食べていこうとかいうことに対して特に強いこだわりはなくて。どっちかというと、続けていくほうがメインで。で、就職しなかったのも、私、いろんなことにやる気がないかもしれないんだけど（笑）。だから、みんななんでお芝居でご飯を食べていきたいと思ってるんだろう（笑）。みたいな感じのことは思ってて。バイト、非正規雇用なので、そんなにたくさんのお給料がもらえるわけではないけど、割と自由がきくから。公演があるので 2 週間ぐらい休みたいですって言っても、今働いてるところは問題なく休めるので。そういう、演劇を作るために、煩わしいこととか時間を取られることがあんまり多くないほうがいいなと思ってて。おカネはあったほうがいいんでしょうけど、そんなにたくさんなくてもいいかなと思ってるので。ご飯を食べるのに困らなければいいぐらいにしか思ってないので。だからそういう働き方をずっとしている感じですね。

—演劇を続けていくことって、演劇を生活の中心には据えてる感じはするんですけど。自分にとってはどういう影響がありますか？

瀧原：それ、割と聞かれたりするけど、ほかにすることがないからって（笑）。答えているんですが。理由はよく分からないんですよ。特にこういう理由があってお芝居を続けていく気持ちを強く持ってるみたいなのはなくて。で、本当に、ほかにすることがないんですよってしか（笑）、言いようがないんだけれど。興味があるものがほかにあったり、何かやりたいことがほかにあれば離れていくのかもしれないなと思うんですが。お芝居をやること以外に、興味がないっていうのもちょっと違うと思うんですけど。何かやってもね、お芝居のことを考えてしまうんです。

これね、私の母親が死んだ時の話なんだけど、うちの母親が癌で亡くなる前に、親戚とか遠くから、宮城じゃない遠くからみんな集まってきたんだけど、もうちょっと状態落ち着いてきたから、みんないったん泊まってるホテルとかうちとかに帰って少し休もうってなって。誰もいなくなって、私 1 人だけそこ、病室に

残ってたんだけど。その時に、登場人物が全員舞台上に集合したにも関わらず、それが全員はけたあとに、母親はひっそりと息を引き取ったのね。なんで、みんな来てるのに、そういうことになるんだろうって思ったりして。そのあと、うちに、病院から葬儀屋さんに連れてってもらった。で、服を自分ちの中に浴衣とか着替える和装とかみたいなやつ、浴衣とかあれば持ってきてくださいって葬儀屋さんに言われて探しに行った時に、扉、棚をぱっと開けた時に、紙が１枚ぱらんと落ちてきたのね。これなんだろうと思ったら、母親と、私、兄がいて、でも兄は私が生まれる前に死んでるんだけど、母親と兄が一緒に写ってる写真がはらっと棚から落ちてきたのね。これどこにあったんだろう、なんで今落ちてくるのと思って。もう絶対舞台監督がうしろで。なんでこんなことが起きるんだろうなっていうふうなことがあったりして。なんかね。演劇みたいだなって思ってる。

—生き方、生活自体が。

瀧原：うん、そう。

—影響された劇団とか、人とか、なんかありますか？

瀧原：たぶん私自身っていうか、三角フラスコ自体が影響を受けているのは、十月劇場だと思いますね。最初の時、最初にお芝居を始めた時に、テント公演とかを観ててすごいなっていうのがあったので。それはすごく影響を受けているんじゃないかなって。影響を受けているからといって、そのままぽろっとは出ないのかもしれないけど。

—自分の演劇に与えた影響

瀧原：自分の演劇に与えた影響って、何か影響与えられてるものってあるかな。直接演劇からじゃない。私自身が影響受けるのって、直接演劇からじゃないかもしれないですね。

—例えば？

瀧原：なんか、出かけて行った先の景色とかかな。でっかい建築物が、でっかい建築物が好きで。ダムとか工場とか。でもそれがどういうふうに作品に影響を、私に影響を与えているかと言ったらね。でもそれは、自然と人間の関係みたいなのかもしれないけど。

—先ほど、生活自体が演劇であるとおっしゃっていましたが、なんで自分が演劇をやめない、手放さないと思いますか？

瀧原：分かんないけど。だから。え？　演劇がなくなったら、しょうがないから（笑）。観たりしないと思うけど。そこにある限りは、辞めようって思わなきゃいけない理由もないし。だってそこに演劇あるんだもんっていう感じがする。例えば、え、だって辞めるのって、辞めますって強く思わないと辞められなくない？　もしね、お芝居をしてください、出てくださいって言われなくなったとしても、観に行くことはたぶんするだろうし。世界中で何も上演されないっていうことは考えられないので。辞めよう、もう観に行かないとかもうやらないとかって思わないと、たぶん辞めないんじゃないか。いつの間にか離れていったとかっていうことはないような気がする。

たぶんね、私ね、人間が好きなんだと思うんですよ。これはね、学校にいる頃は人間は嫌いだと思ってて。学校も嫌いだったし、学校に行くと人がたくさんいるし。町の中とかもとにかく人がたくさんいるところは好きじゃなかったから。人間が嫌いだと思ってて。でも、ある日、「え、人間嫌いだったら演劇やらなくね？」って思って。私は人間が好きなんだなってその時に気づいて。その時が何を思ってるとか、何を考えてるとか、あと。え、ここ別に泣かなくていいな。何が辛いとか何が幸せだとかっていうことを考えて生きているのを、見たり触れたりするのが、たぶんすごく幸せなことだろうなと思います。

—ありがとうございました。